

「あなた」の使い方のニュアンス

ミハイル キリク

日本語の第二人称はとても難しい。ロシア語なら、たいていの場合が「*ty*」そして ていねいな場合で「*vy*」ですむ。英語なら「*you*」ひとことでこと足りる。

それに対し、日本語はそうはいかない。あなたさま、あなた、あんた、きみ、きさま、おまえ、おまえさん、てめえ、このやろう。日本人は習慣で無意識のうちに使いわけているようだ。性別、年齢、地位、相互関係などさまざまなデータを入力し、一瞬のうちにふさわしい人称代名詞を選び出す能力は大変なものである。

しかし、これを法則づけるのはきわめて困難であり、したがって、日本語を習得しようとする外国人にとってはなんともやっかいなことなのだ。

へたにランクをまちがえようものなら、ひどく失礼なことになり、相手の感情をそこねてしまうだけに、日本人でもいたく神経を使う場合があるらしい。

もっとも標準的なのは「あなた」である。日本語の初級テキストでも文法書でも、第二人称の説明の部分で、「あなた」は「尊敬のニュアンスを帯びている」、「もっとも広く使われる」、「ほとんどの場合に適している」等と書かれている。

だが、実際はそう簡単ではない。「あなた」の用法は時と場合によって微妙な違いがあるばかりでなく、「あなた」を使ってはならない相手もあるのだから、なんとも難しい。

私は日本滞在中、日本人の生きたことばづかいに気をつけていたが、上司、親、年長者、教師などに対して「あなた」が使われるのを耳にしたことはない。デパートの店員もお客に「あなた」とはいわない。してみると、「あなた」は尊敬度の

低いことばなのだろうか。

しかし、そうともいいきれない。新聞紙上の広告などは「神さま」であるお客に対して「あなた」を連発している。神さまによびかけるのだから、これは最もうやうやしいことばであるに違いない。

また、「あなた」には敬意というより、ある種の感情がこめられている場合もある。妻の夫に対する「あなた」がそれで英語の「ダーリン」と似ているのかも知れない。この「あなた」をロシア語に訳すときに「*ty*」や「*vy*」ではふさわしくないことがある。

しかし、「あなた」は第二人称の敬語として日本人の現代言語生活で広く使われているのである。

日本ではコマーシャルが異常なまでに発達しているが、そのなかでも「あなた」はよく使われている。

*自動車で味わえない大空のスリムとスピードをあなたに！（航空会社の広告）

*心をこめてあなたに・・・私たちの108曲（レコード会社の広告）

*あなたの眼の若返り！（眼鏡店の広告）

*大きな拍手を浴びて、ふたたび、あなたの街で（自動車ショーの広告）

*あなたのライフスタイルを部屋づくりに活かしてみませんか。（建築会社の広告）

広告でこれほど頻繁に「あなた」が使われるのは広告の対象に敬意だけでなく、親しみをこめた呼びかけで引きつけ、「あなた」の財布の口を開かせようとするものであることはいうまでもない。

ところが、こうした「あなた」の用法だけで安心してはいられない。「あなた」を使つてはならない相手がある。

たとえば、上司に対は「あなたのお部屋へうかがってよろしいでしょうか」とはいわない。「あなた」を省略し「お部屋へうかがってよろしいでしょうか」という。

上司に対してどうしても「あなた」といわなければならないときは「課長」もしくは「課長さん」というように役職名でよぶ。教師に対して「あなたは東京からこられたのですか」といえば、敬意どころか不遜な学生だと思われる。「先生は東京からこられたのですか」というのが普通である。

「あなた」を絶対に使ってはならないのは、店員がお客に対するときだ。デパートでは新採用の女店員に与える注意事項に乱暴なことばづかい、方言の使用を禁じているほか、「あなた」を含む30余のことばを使用禁止語にあげている。デパートの店員教育の責任者は、なぜ店員が客を「あなた」と呼んでならないかについて「“あなた”は たしかに響きのいいことばで、友人同士ならかまわないが、初対面の人に“あなた”といえば相手はびっくりするだろう。“あなた”は親しすぎるので敬語として適切ではない」と語っている。

— 尊敬の意味があるという「あなた」

— うっかり使うと相手に失礼になるという「あなた」

いったいどう解釈したらよいのだろうか。一見 “平等” に見える社会に複雑な階層があるだろうか。この国の近代化の歴史的過程を反映したものだろうか。それとも、この国でよくいわれる“気くばり”の結果だろうか。敬語の問題とも関連して、考えだすとなかなかめんどうな ことになる。日本の友人たちに聞いても、なかなか適切な回答は得られない。

たしかに、少なからぬ日本人が、自分より地位の高い人に対しては「あなた」と呼びかけにくいことを肌で感じているようである。理屈はともかく、現実には面と向かってはいいにくいらしい。地位の高さだけでなく、自分より目上の人には使えないのである。

日本のある新聞社が行なったアンケート調査によるとこれと同じ意見を持つ人は回答者の58%を占めた。38歳の主婦は「地位の高い人には絶対に“あなた”を使うべきでない。“あなた”を使うのは親しい友達、若い人、それに夫と子供に限られています」と書いている。それにもかかわらず、目上の人に「あなた」を使うべきだと主張する人も少なくない。先にあげた新聞社のアンケート調査でもそうした意見の持ち主が回答者の25%を占めていた。

さらには、これからの日本語は平等の精神にのっとったものにすべきだとの立場から、英語の *you* と同じく、「あなた」も上下の別なく一律に使うべきだという人も29%に達した。

国語審議会はかつて1952年に、敬語で相手を指す標準語を「あなた」にするよう提案したことがある。これに対して、当時、いろいろな意見が出たが、そうした“規範化”にはっきりと反対をとなえる人もいた。その論拠は、もともと美しく、豊かな日本語が、規範化によって無味乾燥なものになってしまうというところにあった。

要するに「あなた」の用法はきわめて複雑なので、使うにあたっては気をつけ、単純にロシア語「*vy*」にあてはめてはいけないこと、できるだけ現代日本人の言語生活の習慣に合わせることが大切である。

“人称”について、日本の新聞おもしろい文が載っていたので、それを引用して本章の結びとしたい。

「日本語を話すとき、いちばん危険なのは相手の人称の選択である。“君”というのはいけない。よほど親しくなければ “君”とはいえない。

“あなた”というのもなれなれしすぎる。やはり ふつうは “あなた” だろうが、これも目下から目上へは言いにくい。目下というのは今の社会ではよほど年がひらいており、若いということだが、たとえば新入社員が社歴三十年の大先輩に “あなた” といえよ ほど非常識ととがめられる。

日本語をならいはじめた外国人に二人称どういえばよいのか、と質問される。ごく初歩の人には “あなた” と言うと言える。

しかし、少し進んでくれば、人称はなるべく使わないのがいいと答える。

相手を一度も呼ばず、しかも きちっと、まぎらわしくなく話せる人がいれば、その人は日本語のかなりの達人といえよう。

しかし、達人なんて、そうざらにはいないから、とにかく、急場を切りぬけようと “先生” を連発する人がいる。

人称は日本語の中で難問中の難問だ。